浸透するインテリジェンス：島津製作所の生成 AI 戦略と知財業務変革におけるリーダーシップの分析

Gemini Deep Research

エグゼクティブサマリー

本レポートは、株式会社島津製作所における生成 AI の活用戦略、特に知的財産（IP）部門が主導する業務変革と、業界イベント「Patentsight Summit 2025 」での発表内容に焦点を当て、その詳細と戦略的意義を分析するものである。分析の結果、島津製作所は生成 AI の実践的かつ効果的な導入企業として、特に知財部門を戦略的先駆者と位置づけることで、全社的な変革を推進していることが明らかになった。

同社の成功は、中央集権的なトップダウン型ではなく、分権的かつ課題解決志向のアプローチに起因する。特に知財部門のような事業部門が、具体的なビジネス課題を解決するために、自律的にクラス最高の AI ソリューションを探索・導入し、明確な投資対効果（ROI）を生み出している。このモデルは、まず知財部門でその有効性が証明され、現在では航空機器事業部や研究開発、営業部門など、組織全体で同様の成功事例が展開されており、企業全体に浸透する強力なインテリジェンス能力を構築しつつある。

この成功を支える主要因は、部門の自律性、戦略的パートナーシップ、そして測定可能な効率向上への集中である。今後の展望としては、これらの部門ごとの成功を組織全体でスケールさせるために、技術的サイロ化を避けつつ、ガバナンスを形式化していくことが重要な課題となるだろう。本レポートでは、これらの活用事例を詳細に分析し、島津製作所の AI 戦略の全体像と競争優位性の源泉を明らかにする。

---

1. 戦略的ブループリント：島津製作所の企業ビジョンにおける AI の位置づけ

島津製作所の AI への取り組みは、個別の実験的な試みに留まらず、同社の企業戦略および長期ビジョンに深く組み込まれた、経営の根幹をなす要素である。中期経営計画から経営トップのビジョン、さらには具体的な投資戦略に至るまで、AI は事業成長と効率化を牽引する中核技術として明確に位置づけられている。

1.1. 中期経営計画（2023-2025 年度）における AI と DX

島津製作所の現行中期経営計画では、AI が成長と効率化を実現するための主要な駆動力として明記されている。計画では、特に液体クロマトグラフ（LC）や質量分析計（MS）といった基幹事業領域において、AI 活用による「Only One ソリューション」の提供や、プロセスの自動化・効率化を推進する戦略が掲げられている[1]。

この戦略を裏付けるのが、具体的な投資計画である。同計画では、3 年間で研究開発費に 7,300 億円、設備投資に 8,000 億円という大規模な成長投資をコミットしており、AI および DX（デジタルトランスフォーメーション）がこの投資配分における明確な優先事項であることが示唆されている[2]。この財務的なコミットメントは、これらの技術が単なる流行ではなく、長期的な企業価値向上に不可欠な戦略的要素であることを物語っている。

さらに、同社が経営指標として新たに ROIC（投下資本利益率）を導入したことは、資本効率を重視する姿勢の表れである[1]。これは、AI を含む技術投資が、具体的なリターンを生み出すことを厳しく評価するという、規律ある経営方針を示している。

1.2. 経営トップのコミットメントとビジョン：「人と地球の健康」から実践へ

島津製作所の AI 戦略は、「世界のパートナーと共に社会課題を解決するイノベーティブカンパニーへ」というスローガンと、「プラネタリーヘルス（人と地球の健康）の追求」という企業理念に支えられている[5]。AI は、これらの壮大な目標を達成するための重要なツールとして位置づけられている。

代表取締役社長である山本靖則氏は、AI を社会課題解決に活用することの重要性を強調する一方で、それを適切に活用しなければならない「諸刃の剣」と捉えており、技術の可能性とリスクの両方を深く理解していることが窺える[6]。このトップレベルの nuanced な視点は、同社の AI 導入が慎重かつ戦略的に進められていることを示唆している。また、DX の推進によって生産性と収益性の向上を目指す方針が明言されており[7]、技術導入が中核的な財務目標と直接的に結びついている。

このように、島津製作所の AI 戦略は、壮大なビジョンと、ROI を重視する極めて実践的な実行計画が両輪となっている。高邁な企業理念が従業員やステークホルダーを鼓舞する一方で、ROIC のような具体的な経営指標が、技術投資が測定可能なビジネス成果に結びつくことを保証している。これにより、多くの企業が陥りがちな、成果の伴わない「イノベーションごっこ」を避け、地に足の着いた変革を実現しているのである。

1.3. 戦略的 AI 投資ビークルとしての CVC ファンド

AI 戦略を具体的に実行するための重要な仕組みが、2023 年 4 月に設立されたコーポレートベンチャーキャピタル（CVC）ファンド「Shimadzu Future Innovation Fund」（Shimadzu FIF）である。運用総額 50 億円、運用期間 10 年というこのファンドは、同社の AI 戦略における具体的なアクションプランと言える [8]。

その象徴的な投資先が、製造業向け AI を開発する日本のスタートアップ企業、Rutilea（ルティィリア）社である。この投資の目的は、「自社製造現場の製造 DX や当社製品への AI 機能の強化」と明確に述べられており [10]、社内プロセスの最適化と社外向け製品の機能強化という二重の戦略的意図が読み取れる。

この CVC ファンド設立の発表の場に、常務執行役員 CTO である糸井賢一氏が同席している点も重要である [10]。これは、これらの戦略的投資が、同社の技術ロードマップと緊密に連携していることを示しており、CVC が単なる財務的投資ではなく、技術戦略の一環として機能していることを裏付けている。

---

2. イノベーションエンジンとしての知財部門：生成 AI による変革の深層

島津製作所の生成 AI 活用の物語において、知的財産部門は単なる一使用者ではなく、変革を牽引するイノベーションエンジンとしての役割を果たしている。同部門は、業界に先駆けて生成 AI を本格導入し、その成功事例を通じて社内全体の AI 活用をリードするベンチマークとなっている。

2.1. 知財機能の戦略的地位向上

島津製作所は、以前から知財部門をバックオフィス機能ではなく、経営に貢献する戦略的リソースとして位置づけてきた。公式な方針として、事業に貢献する知的財産の獲得と有効活用、他社知財権の尊重による事業リスクの最小化、そして戦略的な知的財産網の形成を掲げている[11]。

この戦略的姿勢の具体的な表れが、経営・事業戦略に知財情報を活用する「IP ランドスケープ」への積極的な取り組みである[11]。IP ランドスケープの実践には高度な分析能力が求められるため、この活動が定着していたことは、後に高インパクトな AI アプリケーションを導入する上で肥沃な土壌となった。

この変革を主導したのが、知的財産部長の阿久津好二氏である。同氏はペーパーレス化や IP ランドスケープの立ち上げを推進してきた実績を持ち、その変革志向のリーダーシップが、生成 AI の積極的な導入という大胆な決断を可能にした重要な前提条件であった[12]。

2.2. Patentsight Summit 2025　での発表：AI リーダーシップの証明

2025 年 5 月 28 日に開催された「LexisNexis PatentSight+ Summit 2025」は、島津製作所の知財部門における先進的な AI 活用能力が公に示された重要な場となった[14]。

このサミットで、阿久津部長は「知財領域における AI の活用」と題されたパネルディスカッションに登壇した[14]。京セラや旭化成といった業界の有力企業と肩を並べて議論に参加したこと自体が、同社がこの分野のソートリーダーとして認識されていることを示している。

サミット後の業界観測筋（例えば、ブログ「よろず知財コンサルティング」）からの評価は極めて高く、島津製作所の生成 AI 活用の「実用化の進捗の先進性」が特に称賛された[17]。

ここで明らかになった最も重要な事実は、島津製作所の知財部門が「推論モデルの最新の生成 AI を使用しており、しかも、知財部門が独自に契約して使っている」という点である[17]。多くの企業が、全社的に提供される低レベルな AI ツールに不満を抱え、活

用が進まないという壁に直面している。その中で、島津製作所の知財部門は、性能を最優先し、保守的な全社 IT 調達プロセスを回避して、自らの判断で最高のツールを導入するという戦略的決断を下した。この「プロアクティブな調達モデル」こそが、他社との差別化を可能にした核心的な要因である。全社の生成 AI 予算の大半を知財部門が使ってしまったという逸話は[17]、目的達成のためには内部的な摩擦も厭わない、同部門の強い意志と自律性を象徴している。

2.3. AI 駆動型知財ワークフローの解体

島津製作所における生成 AI の活用は、理論的なものではなく、知財ライフサイクル全体にわたって具体的な業務に適用され、劇的な効率向上を実現している。第三者による分析レポートに基づくと、以下のような変革が推察される[12]。

- **特許出願・権利化プロセス**: AI は、特許出願依頼書の作成や簡易的な先行技術調査を支援する。ある試算によれば、従来 15 時間かかっていた作業が 1〜2 時間に短縮され、約 90% の時間削減を実現している[12]。さらに、明細書のドラフト作成や拒絶理由通知への対応案作成も支援している。
- **先行技術調査・クリアランス調査**: AI は、膨大な特許文献の中から関連性の高い文献を効率的に抽出し、要約することで、調査の質と速度を飛躍的に向上させる。人間では見落としがちな技術的示唆やパターンを発見する可能性を秘めている[12]。
- **契約書レビュー**: AI ツールは、契約書の中から知財関連条項を自動的に抽出し、リスク評価を行うことで、レビュー業務の効率化と精度向上に貢献していると見られる[12]。
- **発明発掘**: AI は、研究開発データを分析し、新たな技術的示唆や発明の可能性を抽出することで、イノベーションの最上流であるアイデア創出プロセスを支援する[12]。
- **IP ランドスケープ**: 生成 AI は、大量の特許データを分析・要約し、さらに市場データや学術論文といった異種データを統合することで、IP ランドスケープの能力を劇的に増強する。これにより、事業戦略や研究開発計画に資する、より迅速で深い洞察を提供することが可能になる[11]。

生成 AI は、単に知財部門の業務を効率化するだけでなく、その戦略的価値を増幅させている。定型的な作業を自動化することで、高度な専門知識を持つ人材を、IP ランドスケープやオープン・クローズ戦略の策定といった、企業の方向性を左右する高付加価値業務に集中させることができる。これは、同部門が以前から掲げていた戦略的目標

と、それを実行するためのオペレーション能力との間のギャップを埋めるものであり、知財部門の役割を、資産の受動的な管理者から、事業戦略を能動的に駆動するドライバーへと変革させている。

表 2.1 生成 AI による知財業務の変革

知財業務	従来の課題	生成 AI の適用	活用技術（推察/公表）	報告/推察されるインパクト
特許出願依頼書作成	手作業が多く、時間がかかる（推定 15 時間）。高度な専門知識が必要。	AI による依頼書作成支援と簡易的な先行技術調査。	「島津 ChatGPT」、最新モデル（例：GPT-4o, Claude 3）[12]	作業時間を約 90% 削減（1〜2 時間へ）。専門家が戦略的業務に集中可能に[12]。
先行技術調査	網羅的な調査は時間がかかり、膨大なデータの中から関連文献を見落とすリスクがある。	特許文献の効率的なスクリーニング、要約、パターン認識。	AI 検索ツール、セマンティック分析 [12]	調査の速度と質が向上。人間では気づきにくい技術的示唆を発見。
IP ランドスケープ	特許、市場、学術論文など異種データの統合分析に多大なアナリスト工数を要する。	大量の異種混合データセットの自動分析と要約により、トレンドや競合戦略を特定。	データ統合・要約のための生成 AI [11]	より迅速で包括的な戦略的洞察を提供。2 件の新規事業戦略立案に貢献 [12]。
契約書レビュー	手作業による確認が中心で、反復的かつ人的ミスによる重要条項の見落としリスクがある。	法務文書内の知財関連条項の自動抽出とリスク評価。	法務文書分析用の自然言語処理（NLP）[12]	契約書レビューの速度と正確性が向上し、法的リスクを低減。

3. 知財部門を越えて：島津製作所のコア事業部門へ広がる AI 活用

知財部門での成功は、単独の現象ではない。それは、島津製作所全体で展開されている、より広範で課題解決志向の AI 導入戦略の縮図である。研究開発から航空機器、グローバル営業に至るまで、同様のアプローチが適用され、AI 技術の多様性と導入モデルの再現性の高さが示されている。

表 3.1 島津製作所における主要な生成 AI イニシアチブの概要

プロジェクト名 / イニシアチブ	事業部門	中核的なビジネス課題	AI ソリューションと主要技術	主要パートナー	主な成果
知財ワークフロー変革	知的財産	時間のかかる手作業の知財業務（調査、ドラフト作成、分析）。	知財ライフサイクル全体を支援する AI ワークフロー。	（社内、および高性能 AI モデル提供者）	特定業務で約 90% の時間削減、戦略的分析能力の強化。
「航辞援」（こうじえん）	航空機器	手書きメモを含む 350 種類以上の複雑な技術文書の非効率な検索。	高度な OCR を備えた AI 駆動型エンタープライズ検索。**Google Vertex AI Search**。	**grasys** [20]	1 検索あたりの時間を半減。従業員満足度がほぼ倍増（42.5→75.2）[21]。
「CellTune」（セルチューン）	ライフサイエンス研究開発	細胞培養条件の最適化プロセスが遅く、高コストで専門家の経験に依存。	LC-MS データから最適な培養条件を予測する AI ソフトウェア。**Epistra Accelerate**。	**Epistra** [22]	研究開発サイクルの抜本的な高速化と実験コストの削減 [23]。

「スマートカタログ」	グローバル営業・マーケティング	ベテランと新人の知識格差、海外営業チームの言語の壁。	デジタルカタログシステムに統合された生成 AI チャットボット。	**VISUAMALL** [24]	本社への問い合わせ 2 割削減、情報検索時間 3 割削減（見込み）[24]。

3.1. ケーススタディ：「CellTune」による研究開発の加速

- **課題**: バイオ医薬品やライフサイエンス研究において、細胞培養条件の最適化は極めて重要だが、時間とコストがかかり、専門家の経験と勘に大きく依存するプロセスであった[25]。
- **ソリューション**: 島津製作所は、AI スタートアップの Epistra 社と提携し、「CellTune」を開発した。これは、島津製作所製の液体クロマトグラフ質量分析計（LC-MS）から得られるデータを AI が分析し、最適な培養条件を提案するソフトウェアである[22]。特に、AI の「自動最適化モジュール」は、複数のパラメータを同時に一括で検討できるため、人間には想起しにくい全体最適解を見つけ出すことが可能である[22]。
- **パートナーシップモデル**: これはオープンイノベーションの典型的な成功事例である。島津製作所が高性能な分析ハードウェア（LC-MS）と市場アクセスを提供し、Epistra 社がベイズ最適化を基盤とする専門的な AI エンジン「Epistra Accelerate」とデータ解析の専門知識を提供した[23]。
- **インパクト**: このシステムは、最適条件を見出すために必要な実験回数を劇的に削減し、研究開発の期間短縮とコスト削減を実現した。これにより、より高品質な細胞の商業生産が可能になる[23]。

3.2. ケーススタディ：「航辞援」による組織ナレッジの解放

- **課題**: 航空機器事業部の品質保証部では、350 種類を超える膨大な文書群の検索に膨大な時間を費やしていた。これらの文書の多くはスキャンされた手書きの報告書であり、ナレッジマネジメント上の大きなボトルネックとなっていた[20]。
- **技術選定**: IT サービスプロバイダの grasys 社と協力し、Google の Vertex AI

Search、Amazon Kendra、Microsoft 365 Copilot の 3 つのサービスを厳格に比較評価した。最終的に Vertex AI Search が採用された決め手は、その卓越した OCR 性能（特に手書き文字や図面に対する）、回答精度の高さ、そして予測しやすい料金体系であった [20]。

- **ソリューション**: 開発されたシステムは「航辞援」（有名な国語辞典「広辞苑」にかけた名称）と名付けられた。従業員は自然言語で質問を入力するだけで、AI が要約された回答と、その根拠となる文書の該当ページへのリンクを提示する [21]。
- **インパクト**: 成果は劇的であった。1 回あたりの平均検索時間は半分以下に短縮された。従業員満足度調査では、導入前の平均スコア 42.5 に対し、導入後は 75.2 へとほぼ倍増した。ある従業員は「改善前は 0 点、改善後は 80 点」とコメントしており、日常業務における深刻なフラストレーションが解消されたことを強く示している [21]。

これらの事例から浮かび上がるのは、島津製作所の AI 導入戦略が一貫した再現可能なパターンに基づいていることである。それは、**「課題中心、パートナー活用、成果実証」**という三つの柱から成る。すべてのプロジェクトは、技術ありきではなく、明確でインパクトの大きいビジネス課題から出発する [20]。そして、自社の限界を認識し、最高の技術と実行スキルを持つ外部専門家（grasys、Epistra など）と戦略的に提携する [20]。最後に、時間削減のような「ハードな」ROI や、従業員満足度のような「ソフトな」ROI を通じて成果を測定し、その成功が次の投資への正当性を生み出し、組織全体の変革への勢いを構築している。この一貫した方法論こそが、同社の AI 活用の成功を支える「秘伝のタレ」であり、単なる事例の羅列よりも深い戦略的意味を持っている。

---

4. 戦略的分析と今後の展望

本セクションでは、これまでの分析結果を統合し、島津製作所の AI 活用の道のりを包括的に評価するとともに、将来の軌道と戦略的課題を考察する。

4.1. 成功要因と競争上の差別化

島津製作所の AI 活用における成功は、いくつかの重要な要因に起因しており、これらが同社の競争優位性を形成している。

- **部門の自律性（「スカンクワークス」モデル）**: 知財部門のような事業部門が、機敏で独立したイノベーションハブとして機能することを許容した点が大きい。これにより、中央集権的でトップダウンなアプローチよりも迅速に、かつ優れた技術を導入することが可能になった [17]。このモデルは、官僚的な障壁を乗り越え、現場主導で価値を創出するための効果的な手法である。
- **実践的な課題解決**: AI プロジェクトが、常に具体的でコストインパクトの大きいビジネス課題の解決に焦点を当てている。これにより、AI への投資が測定可能な価値を生み出し、組織全体の支持と変革への勢いを醸成している。
- **戦略的パートナーシップ**: 自社だけですべてを賄うことはできないという成熟した理解に基づき、専門性の高いパートナー（grasys、Epistra など）を的確に見極め、協業する能力は、開発を加速しプロジェクトのリスクを低減するコアコンピタンスとなっている [20]。
- **品質への投資**: 知財部門の調達判断や航空機器事業部での厳格な技術評価に見られるように、クラス最高水準の AI モデルやサービスに対価を支払うことを厭わない姿勢が、最終的に優れた成果につながる重要な差別化要因となっている [17]。

4.2. 認識される課題と戦略的考察

成功を収める一方で、今後のさらなる発展に向けて考慮すべき課題も存在する。

- **大規模展開におけるガバナンス**: 成功を収めた「スカンクワークス」モデルは、将来的なガバナンスの課題を内包している。異なるツール、セキュリティプロトコル、データサイロが乱立する断片的な状況を招くことなく、これらの成功を全社的にどうスケールさせるか。知財部門が AI 予算を大きく消費したという逸話は、部門間の摩擦の可能性を示唆している [17]。より形式化された AI ガバナンスのフレームワーク構築が不可欠となるだろう。
- **データ戦略**: AI が組織に浸透するにつれて、一貫性のある全社的なデータ戦略の重要性が増す。部門を横断して、データの品質、アクセス性、セキュリティを確保することは、より高度で複合的な AI アプリケーションを開発するための必須条件となる。
- **人材とスキルアップ**: AI によって手作業が自動化され、業務が戦略的なものへとシフトするにつれて、従業員に求められるスキルも大きく変化する。知財部門で「AI

活用スキル」や「戦略コンサルタント」への役割シフトが指摘されているように[19]、組織全体でトレーニングと人材開発への長期的かつ計画的な投資が必要となる。

4.3. 将来の軌道と戦略的提言

島津製作所の AI 戦略は、支援ツールとしての活用から、より自律的なシステムへと進化していくことが予想される。

- **支援から自律へ:** 同社の投資や関心は、より自律的なシステムへの移行を示唆している。ロボット向け AI 基盤モデルを開発する RLWRLD社への CVC 投資[8]や、「AI エージェント」に関する議論[28]は、AI が支援するワークフローから、AI が自律的にタスクを遂行するオペレーションへの進化を見据えていることを示している。

この未来像を実現するために、以下の戦略的提言を行う。

- **提言 1 : CoE（Center of Excellence　）の形式化:** 現在、知財部門が非公式な CoE として機能している。この役割を形式化し、ベストプラクティスの共有、共通のガバナンスとセキュリティ基準の策定、全社的な技術選定のガイドを行う中央組織を設立すべきである。これにより、「スカンクワークス」モデルの利点である機動性を維持しつつ、そのリスクである断片化を抑制し、成功を組織全体にスケールさせることが可能になる。
- **提言 2 : 「社内 ROI」のストーリーを強化:** 「航辞援」プロジェクトの成功が従業員満足度という指標で測定されたことは、非常に強力な社内向けメッセージとなる。島津製作所は、こうした社内での成功事例を体系的に測定し、積極的に広報することで、文化変革を加速させ、AI 導入に対する全社的な熱意を醸成すべきである。
- **提言 3 : パートナーシップ戦略の進化:** AI が社内プロセスだけでなく、製品そのものの中核を担うようになるにつれて、より深く、より戦略的なパートナーシップを模索すべきである。これには、長期的な競争優位性を確保するための、主要な AI パートナーとの共同開発や、場合によっては買収も視野に入れるべきだろう。Epistra 社との協業[22]は、その優れたモデルケースとして、さらに発展させる価値がある。

引用文献

1. 中期経営計画 - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/ir/strategy/middleplan.html
2. 島津 統合報告書 2024, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/sites/shimadzu.co.jp/files/ir/pdf/shimadzu_integrated_report_2024.pdf
3. 【QA あり】島津製作所、新中計ではヘルスケア・グリーン領域に注力 社会課題の解決に取り組み、プラネタリーヘルスを追求 - ログミーファイナンス, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://finance.logmi.jp/articles/378965
4. 2023 年度-2025 年度 中期経営計画 - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/sites/shimadzu.co.jp/files/ir/zt1g/b4l9i7v8637vxu8o.pdf
5. 《産総研グループ》革新的な技術・製品開発でプラネタリーヘルスの実現へ！「島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000005.000146304.html
6. 統合報告書 - サイト - 大阪大学, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://oumm.office.osaka-u.ac.jp/alumni/files/copy29_of_.pdf
7. 01 株主の皆様へ 05 業績ハイライト 06 連結財務諸表 07 セグメント別概況 09 特集：新社長インタ - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/sites/shimadzu.co.jp/files/ir/zxoo/mtdq1ivh0jwwor28.pdf
8. CVC ファンド「Shimadzu Future Innovation Fund」 実空間データを用いて製造業向けロボットの AI 基盤モデルを開発する RLWRLD に出資 - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/news/2025/x_c_bsx-lfba0v77.html
9. 島津製作所の CVC の取り組み～出資によるスタートアップ連携～｜Open with Linkers - リンカーズ, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://corp.linkers.net/blog/openwithlinkers/8294/
10. 島津 統合報告書 2024, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/sites/shimadzu.co.jp/files/ir/pdf/shimadzu_integrated_report_2024-r.pdf
11. 知的財産マネジメント | 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/research_and_development/intellectual_property.html
12. 株式会社島津製作所の知的財産部門における生成 AI の活用に関する調査報告, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/2b8a6af9bb5798949372.pdf
13. 株式会社島津製作所の知的財産部門における生成 AI の活用, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/6882b26409c7ce2c42f7.pdf
14. LexisNexis PatentSight+ Summit 2025, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.lexisnexisip.jp/patentsight-summit/
15. 島津製作所の知的財産部門における生成 AI の活用, 6 月 22, 2025 にアクセス、

https://yorozuipsc.com/blog/ai2804577
16. 日本最大級の知財サミット LexisNexis PatentSight+ Summit 2025 5 月 28 日（水）に開催, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000010.000124984.html
17. LexisNexis PatentSight+ Summit 2025 - よろず知財戦略コンサルティング, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://yorozuipsc.com/blog/lexisnexis-patentsight-summit-2025
18. 日本最大級の知財サミット LexisNexis PatentSight+ Summit 2025 5 月 28 日（水）に開催, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://news.biglobe.ne.jp/economy/0414/prt_250414_4743427014.html
19. 島津製作所の知的財産部門における生成 AI 活用の現状と今後の展望, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/a5b82365f73fceb65a65.pdf
20. 島津製作所が膨大な資料を活用するために、"Vertex AI Search"を選定したワケ【開発者視点で深掘り】 (1/3) - CodeZine, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://codezine.jp/article/detail/21113
21. 生成 AI で社内資料検索、欲しい情報をすぐに入手できるシステム 島津製作所の事例から学ぶ, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.itmedia.co.jp/enterprise/articles/2504/22/news002.html
22. プレスリリース 培養最適化支援ソフトウエア「CellTune」を発売 2024 年内に細胞培養関連リカーリング事業を開始へ - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.shimadzu.co.jp/news/2024/ina4ni13d2arwrja.html
23. 研究者の勘を超えてコストを大幅に短縮。AI スタートアップと島津 ..., 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://ascii.jp/elem/000/004/219/4219474/
24. 導入事例：株式会社島津製作所 様｜ビジュアモール (visuamall), 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.visuamall.com/example/sc/2025/03/24/shimazu/
25. CellTune - 分析計測機器 - 島津製作所, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.an.shimadzu.co.jp/products/life-science-lab-instruments/cell-research/celltune/index.html
26. 島津製作所が培養最適化支援ソフト発売 24 年内にリカーリング事業開始 - ゴムタイムス, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://www.gomutimes.co.jp/?p=196885
27. エピストラ株式会社と株式会社島津製作所、共同開発の細胞培養最適化支援ソフトウェア「CellTune」を発売開始 - PR TIMES, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000008.000076234.html
28. シグマクシスによる書籍『AI エージェント革命』が本日発売 - PR TIMES, 6 月 22, 2025 にアクセス、 https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000051.000010818.html